

エコロジー空間論 News

5

2011年5月19日(木) 15:00~17:30

総合地球環境学研究所 講演室

第5回 鳥越けい子(青山学院大学) × 阿部健一(総合地球環境学研究所)

「音の風景」と都市の環境文化資源」

(地球研セミナー トークセッション エコロジー空間論 - 京都の環境空間を生きる -)

1. 「音の風景(サウンドスケープ)」とは?
2. 音風景から辿る環境文化資源
3. 音風景の保全とデザイン



鳥越さん

「音の風景」

「音の風景」: サウンドスケープ(SOUNDSCAPE)の日本語訳。

- ・元々日本語にあった言葉ではない。サウンドスケープは輸入された言葉。
- ・音楽(MUSIC)や芸術(FINE ART)も明治以降に輸入。

サウンドスケープという言葉は、日本の忘れられた音文化発掘に役立つ。

- ・江戸時代 名所図会 虫聴きの図。桜を愛でに行くように、虫聴きに行く。風流。数寄もの。

自然を美的に愛でることを日本人は得意とする。月見。

私たちがサウンドスケープの考え方を得意とする、あるいは生活に生かしていた証拠としての絵図。

(図中で)子供が虫籠を持っている。虫の音を愛でる文化があってこそその虫籠。

言葉としては翻訳語かもしれないが、サウンドスケープは東アジアに親和性のあるコンセプト。

- ・音環境を文化として捉える時には、音だけでなく、クラフト的なものも関係する。

環境文化資源とは?

- ・環境を自然科学のみで捉えず、文化まで一歩進んで解釈する。
- ・音の風景も文化財である。

文化財保護法によって守られているもの(周囲の環境と一体となって価値をなす建造物群、無形文化財、景観、・・・)の中に音も入っている。

LANDSCAPE(風景): ビジュアルのみで捉えられがち。

1960年代から70年代に移行する頃、当時の環境思想や現代芸術を背景に、カナダのマリー・シェーファー(音楽家、環境思想家、文芸評論家)によるサウンドスケープ概念の提唱。

『世界の調律』(原著)の出版は1977年。

「サウンドスケープ」という用語の定義

個人あるいは社会によってどのように知覚され、理解されるかに強調点の置かれた音の環境。

したがって、サウンドスケープとは個人(あるいは特定の共同体や民族その他、文化を共有する人々のグループ)とそうした環境との間の関係によって規定される。

(B. Truax (ed.): "A Handbook for Acoustic Ecology" (A.R.C. Publication, Vancouver, 1978))



USTREAMで配信!

どのように調査するか

モノは残るので遡って研究しやすい。音は5秒、10秒前のものがもう無く、研究しづらい。

一つの方法は、画像から。浮世絵。もう一つは、文献から音の風景を辿る。

太田記念美術館所蔵の浮世絵を手掛かりにして、江戸時代の音風景を辿る。

- ・不忍池。上野(寛永寺境内)は花見。現在でも花見は行われているが虫聴きや虫籠売りはもう無い。近代西洋文明は視覚中心で、他の感覚が脆弱。日本のホリスティックな文化も西洋化してきている。改めてサウンドスケープという考え方は今、日本人にとっても必要かつ有効ではないか。
- ・江戸時代、川に船を出す。その上が音楽空間になる。今の東京で、舟遊びで音楽を楽しむ伝統を復活させる試みをしているが、実質、首都高のうるささに阻まれ、このような楽しみができない。
- ・花火。水辺。いろいろな賑わい空間がある。
- ・日本橋の上の首都高の撤去：視覚的な景観論争が起きているが、音もひどい。音の風景が破壊されているということから、このような議論に至らない。

過去の根拠(浮世絵)を調べ、現代の音を聞き、都市計画を考える。

サウンドスケープを通して、研究もでき、デザイン等の提案もできる。

日本の庭と音響装置

京都詩仙堂 ししおどし

- ・建築と庭が一体化している。秀吉、家康にも仕えた石川丈山の造営。
- ・ししおどしは元々民具。畑を荒らす動物を追い払うためのもの。庭に取り入れたのは初めて。
- ・庭は権力の印だが、詩仙堂はプライベートハウスとプライベートガーデン。

サウンドスケープは、サウンドのみが対象ではない。音をスケープに引き戻す。

- ・従来「音の学」はある。また、ここでのスケープとは、特定の場所と時間(季節や時刻)の環境。
- ・なぜ、石川丈山がししおどしを取り入れたのか? 庭の静けさを味わうため。
- ・どうして静けさを感じるか。うるさいところから静かなところへ移動したときの感覚。

ししおどしの音と音との間を聞く。人工的に演出している音でない部分、即ち庭の豊かな自然音に耳を傾ける。

サウンドスケープの研究に必要な情報源として、図像、言葉、文献、そして、庭そのもの。

ロンドンのホランドパークにある「Kyoto Garden」

- ・ししおどしが置かれているが、メカニズムや音は模倣できても、本来の提示はできていない。
- ・環境と一体化した中で聴くししおどしと、装置としてのししおどしを設えることは、別。

デザイン、プランニング、保全、再生利用にどう関わるか

- ・1986年、『世界の調律』(邦訳)が日本で出回る。1990年頃、日本で様々な取り組みが始まる。
- ・騒音問題。環境行政ではこれまで数値的規制。デシベルで測定。

「練馬・静けさ10選」

- ・騒音計を使わない音の環境教育をめざす。
- ・三宝寺地域。とても「静かなので、たくさんの音が聞こえる」。
- ・「ねりま音マップ」：鐘の音が聞こえる 生活者がどの鐘をどう聞き取るか。

「残したい日本の音風景100選」(環境庁)

- ・音風景の推薦。音、聞こえる場所。聞こえる状況を文章や絵で表現。
- ・流水の音風景調査。北海道の北岸。「流水が生まれ変わる」「流水が鳴く」。



詩仙堂(京都市左京区)



「練馬・静けさ10選」

海が凍ると船が出せないの、生活が貧しくなる。かつては流氷を「白い悪魔」と呼ぶ。実際のメカニズムは、アムール川から大量の真水がオホーツク海に流れ込み、凍る。海洋の循環が起きる。プランクトンが豊富に発生。 漁業を生業とする生活者と流氷に、いい関係が生じている。

- ・ 静岡、遠州灘の波音。天候を知らせる波音。
- ・ 西表島、オオクイナの鳴き声。

なぜもの悲しいか？ 子供を売ったことを後悔した母親が、マングローブ林を彷徨ってオオクイナになるという民話。

100選に選定されてから、モーターボートの乗り入れを廃止。エコツーリズム、音環境の保全。



「残したい日本の音風景100選」推薦用紙より



西表島

音の風景とまち歩き

- ・ 既に市民権を得ている「まち歩き」は視覚中心
- ・ 音を聞きながら歩くワークショップ。サウンドウォーク、リスニングウォーク。
- ・ 「観察」から「感察」へ：全身感覚による都市の理解を促進する。
- ・ 文豪たちが作品に書き留めた武蔵野(渋谷)の音の記録を手掛かりに歩く。
- ・ 耳の証人 (Earwitness)：ある地域で聞かれた過去の音についての記述を含む文学作品など。
- ・ 現在の渋谷：震災後の変化。大スクリーンの放映が消え静かに。109の中など、特徴的な音風景。



「文豪達と歩く「渋谷サウンド・ウォーク」(2008年)の様子

[質疑・ディスカッション]

阿部：

マリー・シェーファーも鳥越さんも、元々音楽の人。しかし、音を音楽だけで捉えないようにする。私たちは環境の中で音というと、心地よい音と不快な音を二つに分けてしまう。サウンドスケープは、それら全てを含めるような思想。

鳥越：

逆に言えば音楽が騒音になることもある。二律背反的に言うことはできない。

阿部：

音楽は芸術。騒音は科学。芸術と科学を分けてしまう。

鳥越：

『世界の調律』でサウンドスケープの本領は、科学と芸術と社会の中間領域にあるといわれている。



阿部：

サウンドスケープが音を含めた環境を一体として捉えることに、初めは驚いた。ランドスケープが大事だとは思いますが、音に関心はなかった。このような考え方はいつ頃から？
本を読むときは目で字面を追っている。朗読から黙読になった。宗教的な行為でいうと、仏教の読経、イスラムのコーランも声を出して読む。翻訳の禁止。音を重視する。

鳥越：

マーシャル・マクルーハンによると、西洋でも中世までは音で神を意識していた。近代以降、パイプ
ルが活版印刷の技術に乗って大量に普及し、たくさんの方が神との繋がりを視覚に頼るようになった。

阿部：

印刷技術の発展に関係していそう。

鳥越：

うちにはネコが居て、音にはすぐ反応する。狩猟民族であれば、耳を使えば音を聞いて危険を察知し、
逃げるができる。一般に、聞かなくても大丈夫という生活になったのかもしれないが、先日の震
災も含め、生き延びるために音を聞くという人は今でもたくさんいる。

阿部：

テレビにもかならず字幕が出る。ビジュアル化。

鳥越：

嗅覚を使う機会も減った。食べられるかどうかにおいを嗅ぐことから、賞味期限を見ることへ。

阿部：

嗅覚も「感察」の一環。

鳥越：

シェーファーが言いたいのは音が大事ということではなく、視覚も含めた五感の重要性。

阿部：

非音楽＝騒音ではないと。個人的な経験があって、後から議論する。

鳥越：

ランドマークに対して、サウンドマークという言葉がある。環境の特徴を担う音。もう一つは、原風
景。音の原風景。

阿部：

全盲の知人がいて、京都と大阪、音だけで区別できるか聞いてみたら、できないとのこと。世界の色々
な町は、において判断するとのこと。

鳥越：

一般的な大阪、一般的な京都はわからないかもしれないが、鶴橋くらいまで絞ればわかるのでは。

阿部：

風聴亭と屋敷林について聞かせてください。

鳥越：

四季を通じての屋敷林は私の音の原風景。関東ローム層に位置するため、防風林が必要だった。昔登
った栗の木が聞けるよう、祖母の家を改築。トタンから鳥の爪の音。栗の落ちる音。屋敷林の音。
デザインは、困ったときにいかに美的に解決するかということ。風聴亭では、古い家の引き戸を残し、
再利用してその音を保存再生した。実際に生活してみると、家族も音でつながっていることを実感。

阿部：

静けさにも色々な静けさがある。ジョン・ケージの作品。

鳥越：

「4分33秒」。環境の芸術化、あるいは現代音楽の環境化。デイビッド・チューダーというピアニストに与えられた譜面は、3楽章構成（ピアノの蓋の開け閉で示した）だが無音。

実際その場に居た人は、期待していたチューダーが演奏しないのでざわざわしているが、次第に外の音が聞こえてくる。また同じ手法は使えないが、マリー・シェーファーは影響を受けた。日常の環境と芸術作品の融合。音楽を白抜きにするときに、音楽を縛っている制度が浮かび上がってくるという、ラディカルな作品。

阿部：

京都は大学と寺が多いが、最近は京都で鐘の音を聞かない。戦前は、時刻を知らせる鐘が鳴る。寺によって違い、見事なハーモニーをつくる。戦後、鐘の音が騒音とみなされるようになる。東山の高台寺周辺とプライダルホテルの周辺には合意がある。知恩院とその関連寺院もそれぞれに合意を得て鐘を鳴らす。音を残したいということも大事であるが、つくるということも大事。

会場の学生さんに、音の原風景と京都の音について聞いてみたい。

学生：

これというのは無いが、育ってきたなかで得てきた音はある。育ったのは九州。自分が育った中で感じていた音が、今の生活の中でも感じられると懐かしい。日本全国どこでも聞けるはずなのに、そうっていない。時間帯がある。夕方、夜、深夜。かえるの音がする。昼間は敏感になれない。京都の音は無い。排気ガスのおい。草のおい。



学生：

音の原風景。新潟で育ったので雪。雪の中を歩く音、傘に落ちている雪の音。だれもいないところを歩いている。京都のシンボルになるような音は、わからない。

学生：

床がきしむとおばあちゃんの家を思い出す。京都の音は、週一でお茶をして、炭がパチパチと鳴る音。茶室に居て、庭を見て、京都らしい。



山下：

北海道出身。左京区で育つ。古紙回収の音。ノスタルジーになるときもならないときもある。祇園祭のお囃子。四条のアーケードの下から年中鳴っているが、無理やり。練習が聞こえてくるのはいいが、無理やり聞かされるのは違う。

学生：

大阪市内に住んでいたため、人の声と足音がいつも聞こえていた。京都に住むとかえるの鳴き声がうるさいし怖い。都会に住んでいると人の声や足音に慣れている。



外部から：

市場の音が原風景。ひとりで旅をするのが好きで、生々しいにおいと合っている。京都の音は、御所の砂利道を踏みしめる音。長くて広い道。出身は鳥取県。

石川：

大阪出身。寺の敷地のなかに住んでいて、原風景は木魚のぼくぼくとした音。現在は京都の石畳の路地に住んでいる。歩いている音で誰が通っているかわかる。



学生：

原風景。車の音。乗用車ではなく、大型トラック。岡山と鳥取の県境に近い。国道を走る深夜の輸送トラックの音がいつも聞こえていた。京都の音。左京区に引っ越してきた。叡電の音。地下鉄は馴染まない。

田口：

原風景は、海のおいと祭囃子。音痴な母の歌声。京都の音は、正午や夕方の時刻を告げる放送。まち毎に特徴があって聞き分ける。

和出：

浜松。近くに自衛隊の基地。原風景は、朝の6時くらいからエンジンの音。誰も起きていない時間から聞こえてくる音は、これから空を飛ぶぞという感じでロマンチック。京都の音。左京区。おそらく南禅寺のお坊さんがお布施をもらいにいくときに野太い声で「ほーうほーう」と言って回る。朝の枕元で言われている感じ。

村松：

原風景は、かえる、虫、田んぼ。京都の音は、鐘の音。イスラムの朝のコーランのよう。京都でも鐘の音を復活させて、自衛隊の基地の音のようにそれが続けば、馴染むのでは。

阿部：

自衛隊のジェット機の音が、原風景にもなる。良い悪いの判断はない。

鳥越：

私の原風景、屋敷林はたまたま良い事例だった。自分の中に環境があって、外と呼応している。なぜあるものをおいしいと思うか。みんなで食べていて、その記憶が味覚をつくる。同様に私たちは人生をかけて音を聞いている。同じ音でも、20歳のときに聞いた音と、今聞く音は違う。見た目と違って、感覚の真実に迫れる。聞いたことの無い音には気づきにくい。マツムシの声は「チンチロリン」と歌では知っていても、マツムシだらけのところに行ってもわからない。自分の中に音のダムがあって、その中に石を投げられているような感覚。女性だとプロフィールから年齢を外されることが多いが、私の場合、1955年に生まれて、どこに住んで、どういう音を聞いてきた、ということ大切にしている。

村松：

鐘の音を騒音と思うのは、西欧の、全体から何かを引き算する文化。

鳥越：

それぞれの人生の氷山の一角を拾い上げる。サウンドスケープの健全な点。

阿部：

京都の音は、田舎から出てきて、市電の音。原風景は、父が四国で燈台守をしていて、子供のころ海に潜って遊んだ。潜ったときに何も聞こえなくなる。戸を締め切ったときとは違う静けさ。

鳥越：

このようなことを話す、話題に出すことが大事。人の話を聞いていると自分の忘れていたこともふと思い出して話し出せる。音楽評論も、映画評論も、音楽や映画について語り合う。風聴亭の話もひとつで、私の原風景からみなさんに対して要求することは無い。20年ほど前に「京都らしい音」の調査をして、印象的だったのは、ある人が「川のとくとくと流れるようなイメージ」と回答したこと。その後、京都を何度も訪れるようになり、そのイメージを実感できるようになった。

阿部：

この講義のまとめとして、何かデザインに結び付けなければと感じていたが、その必要はなさそう。聞く力。音への感性をどう磨くか。



鞍田：

「感察」という言葉が面白い。路上観察のときに、視覚以外の感覚を統合したような路上観察になってしまう。音を感じ察する、そのやり方は？

鳥越：

音をテーマにしているが、音は切り口。見た目もつながってきている。最終的には分けて考えていることそのものもおかしいかもしれない。

村松：

感察のアドバイスは？

鳥越：

住んでいる人に話を聞くこと。

林：

原風景は、電車の音。阪急電車の傍のマンションに住んでいて、始発から終電まで定期的に音がなる。騒音に慣れてくる。電車が終わるとカエルの音に変わる。都市的なものと自然の風景を同時にもっている。阪神大震災のときに、電車が通らなくて、静かすぎて物々しかった。生活の中で音は感性に関わっている。京都の音は、阿部さんみたいな人。関西弁でのプレゼン。話し言葉も地域の音の一つ。

阿部：

プレゼンで「4分33秒」黙ってみたらどうなるのか。

鳥越：

言い足りなかったことは、音の風景は生きものとしての環境、都市の活動実態そのものだということ。たとえば市場の音。マーケットを形として残すことはできても、そこが生き生きしている状態は形だけでつくり出せない。サウンドスケープという考えかたを通して、都市も活動レベルで捉え、建築、ハードの内実に迫ることになる。

次回：2011年5月26日（木）14：40～16：10

京都精華大学春秋館101号室

第6回（ 講義予定に変更あり）

編集後記

第5回は、音の原風景、京都の音について、たくさんの学生さん（なかには、精華大以外から来られた方もいました）や地球研関係者の方の声が引き出され、サウンドスケープの議論にふさわしく、この講義に集った個々人の感性が丁寧なすくい上げられていきました。環境には、デシベルといった共通のものさしに当てはめてのみ考えられない、個々人の感性・感覚によって把握する環境、という側面がある。エコロジー空間論は、シェーファーのいう「科学と芸術と社会の中間領域」に迫ろうとしているのでしょうか。

文責：田口純子（東京大学生産技術研究所村松研究室）